

尾波おなみ

角折の大屋まちづく
りセンター右前方に、
小道がくだっている。
これがかつての往還道
に当たり、以降字は尾
波(おなみ)となる。
前置きが長くなった。
今回の往還行、実際にはこの尾波口から始まるのである。三月十六日、林能伸(よしのお)歴史事務局長以下十四名を以って出発した。先導は、二年前に同じく縄江正治(なわえまさはる)さんである。
ここに尾波の地名考を披露しておきたい。

大屋一大森間の古道

⑤ 往還を行く

おうかん

三井亭



尾波

「小浪(おなみ)村と申すは前に云える如く入海たりし時も此辺迄は凡そ式里(にり)ばかりも有し故、毎(つね)に小浪ばかり打ち寄る故に号すと村老の伝に聞く云々。」
これは江戸時代の石見の地名辞典として知られる「石見八重葎(やえむぐら)」の記述だが、角川日本地名大辞典32「島根県」一六一頁の引用文を復写して(またう)した。
尾波はその美「小浪」で、「大屋の津」は川(ささ)がわを挟んだ山側の筋をいう。此絶(とだ)え、その先度は山側にあたり、事前調査のため単身山へ乗り込んだ縄江さんによると、古往還道なるものは、落石倒木あるいは鬱蒼(うつそう)の蔽(やぶ)やうで、所々途絶(とだ)しても一般人の手に負えるものではないという。従い後設の安路を採るほかなかつた。それでも常々「真往還」と並行しつつ、左目に往時を偲(おも)わせるのである。
春三月といえども、いまだに寒風は痛い。みな背を丸めつつ、先を急ぐ。

(五十猛歴史研究会 会員 みついあつし)

日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす
◇木曜日は内藤博之さんの「カウデ